

大災害転じて 観光地となす

うらぼんだい 裏磐梯高原



写真64 南方上空から見た猪苗代湖と磐梯山

1. 水蒸気爆発

「ビッグバン」。現在の裏磐梯の地域性の形成を考えると、1888年(明治21)7月15日に発生した大噴火をこの言葉にととえるとしても、あながち大げさとはいえないだろう。同日の午前7時45分ごろ、磐梯山主峰北側のピーク小磐梯山が、ごう音とともに1000mを越える噴煙を立ち上らせて大噴火した。1分余りの間に20回ほどの爆発を起こし、最後の爆発が小磐梯の山体を砕いて北側に膨大な岩屑流を押し出した(図100)。

岩屑流は火口から檜原川河谷の上流8km先まで達し、細野、雄子沢、秋元の3集落を埋没させた。さらに岩屑流は泥流となって下流の長瀬川にも流出して、川上集落を埋没させ、長坂を襲って樋ノ口付近まで達した。また一部は、噴火口から東側の枇椀沢を流下して見祢集落到壊滅の被害を及ぼした。見祢にはその時押し流されてきた小山ほどの巨岩があって、噴火の途方もない破壊力を思い知らされる。

こうして、近代以降の世界でも稀に見る大地の巨大なパワーの噴出が、僻遠の地にありながらも死者行方不明約500人という大惨事を一瞬の間に引き起こした。

噴火の被害はそれだけでは終わらなかった。檜原川、小野川、大倉川、中津川などの河川は埋積された泥流に流路を塞がれて数カ月のうちに湖と化したため、泥流の直撃を免れた檜原本村と小野川集落も移転を余儀なくされたのである。檜原は道前原(現在の檜原)と金山へ、小野川は早稲沢に移転した。また下流の猪苗代側でも土田堰の用水供給が断たれて深刻な水不足を引き起こした。

以上が有名な大噴火のてん末であるが、この大噴火と湖の形成こそは、裏磐梯の高原地域を今日の一大リゾート地に変え秀逸な景観をもたらすことになった。噴火後しばらく荒野と化していた泥流原にもやがて草木がよみがえり、大小の200余の湖沼と流れ山の複雑な入り組み、湖面に映える磐梯山の秀峰、山頂直下に赤茶けた地肌をさらして大噴火の迫力を生々しく誇示し続ける爆裂火口が、絶景というに値する比類ない風光を現出したのである。

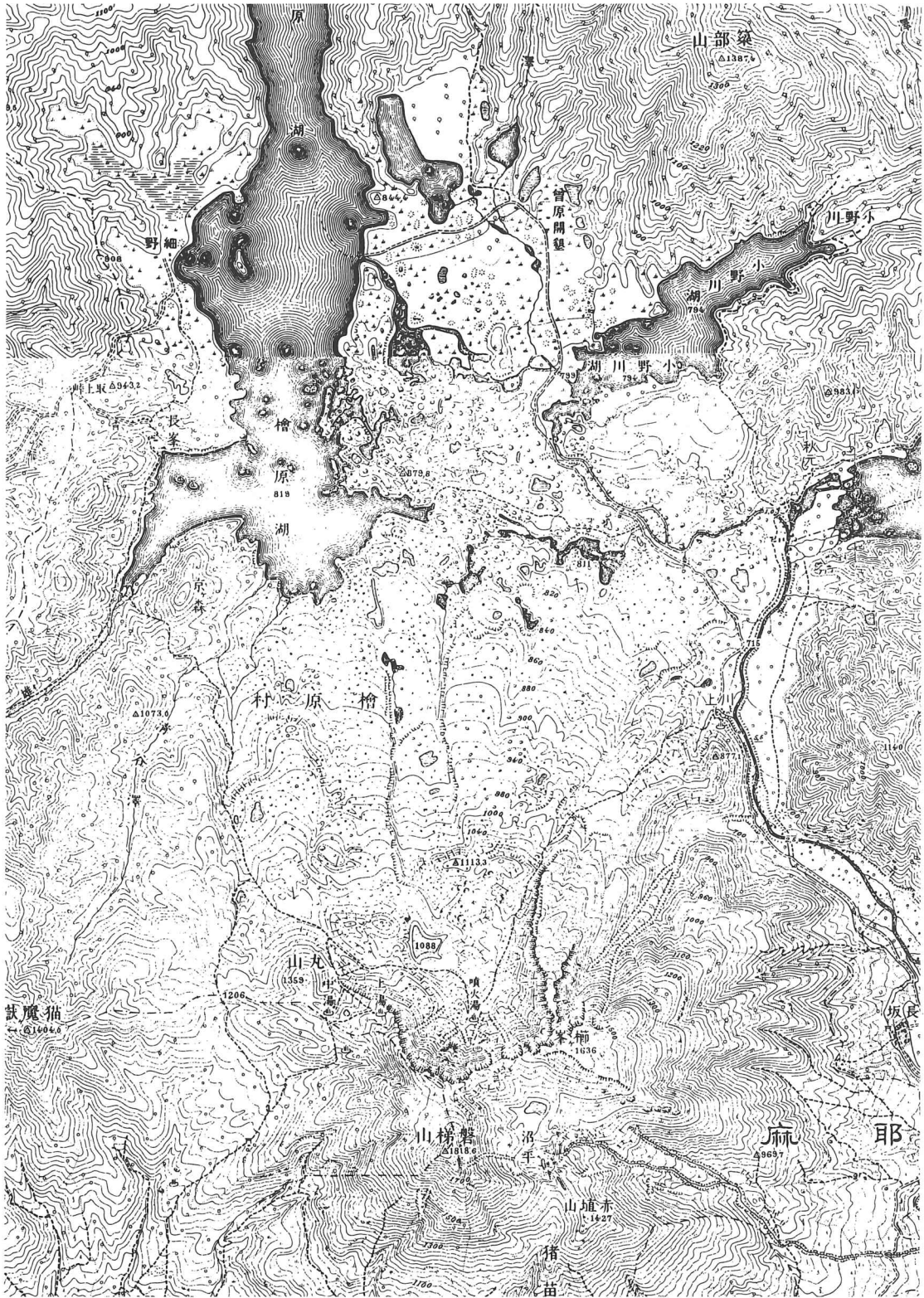


図100 1908年(明治41)の裏磐梯(5万分の1地形図「磐梯山」「吾妻山」明治41年測図, ×0.83)

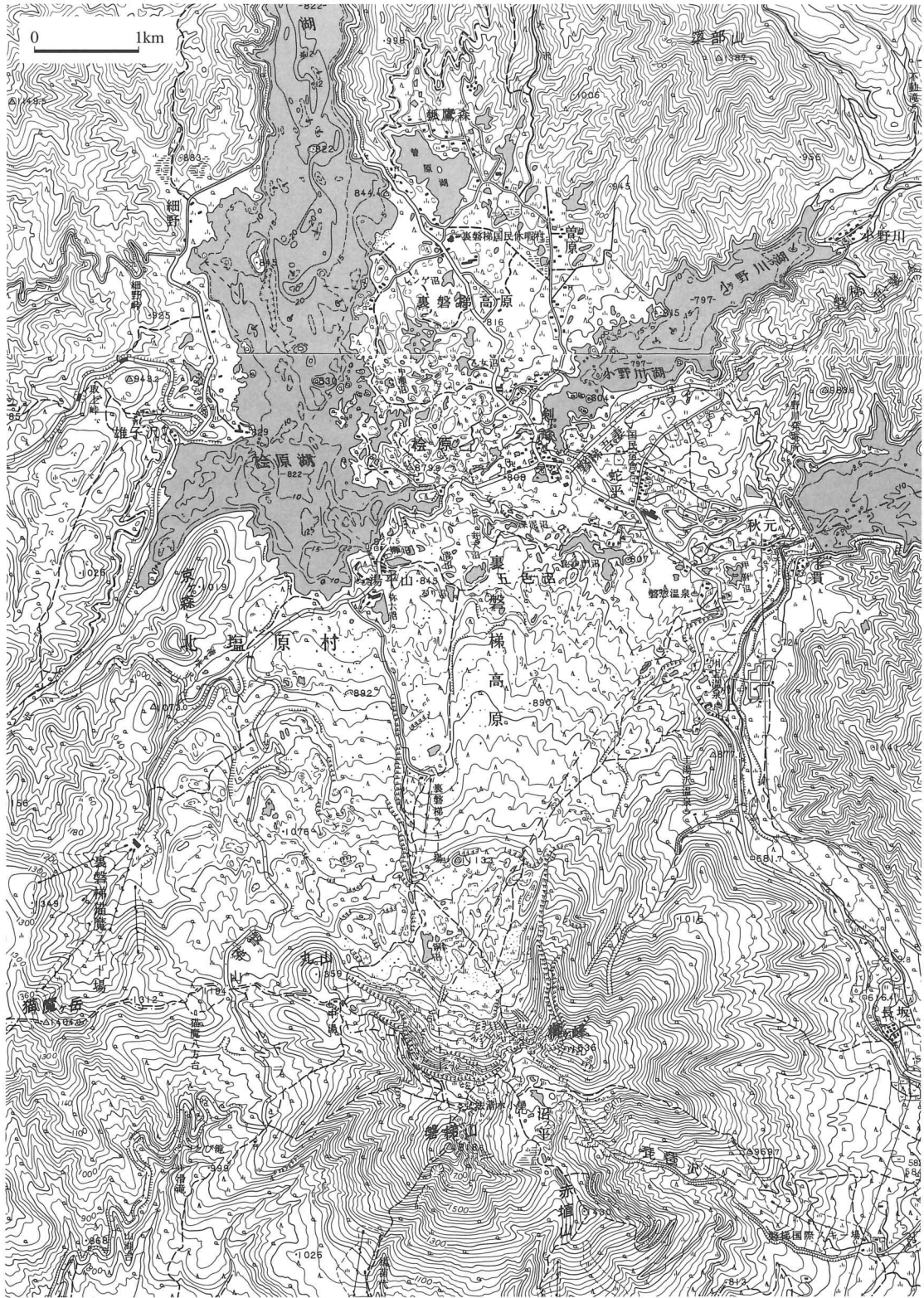


図101 現在の裏磐梯 (5万分の1地形図「磐梯山」平成3年修正, 「吾妻山」平成4年修正, $\times 0.83$)

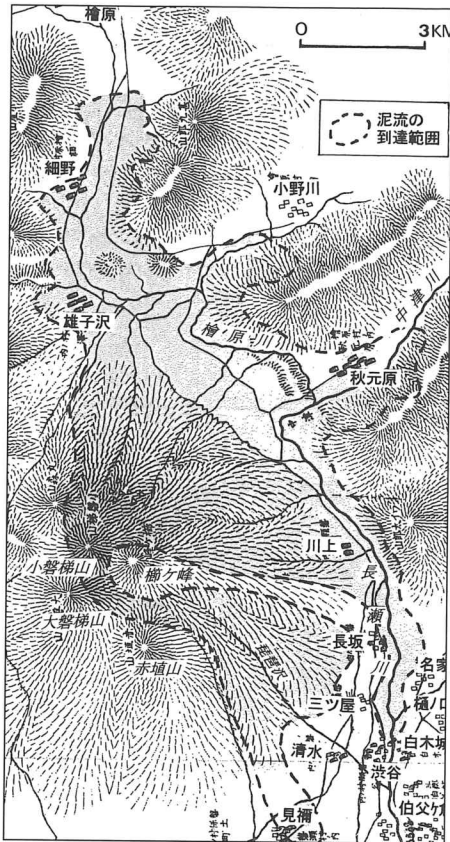


図102 1888年噴火以前の裏磐梯と噴火による泥流の到着範囲
 (『福島縣耶麻郡誌』の付図に一部高野加筆)

2. 開発の歴史

大噴火以前の裏磐梯は、檜原集落が若松と米沢を結ぶ街道の宿駅であり、秋元が会津と越後の藩士による農業開拓集落であったほか、どの集落でも炭焼きや木地加工を主業としていて、小椋姓と佐藤姓が多数を占める。泥流の押し出しで大半が湖底に沈んだ檜原川の埋積谷底や、剣が峰から曾原付近の平坦地は、早くから樹木が切りつくされて草原化し、「〇〇原」という地名が付されるようになった。各集落の隣地には自給用の畑が開かれて雑穀や豆が作られていた。集落や耕地以外の地域のほとんどは官地で、現在でも森林のほとんどは国有林である。噴火の災害を直接受けなかった早稲沢集落は、小椋姓が9割を占める木地師集落で、炭焼きと畑作で生計を立てていた。1921年(大正10)に水田が開かれたことから、ろくろ用の水車に水が供給されなくなって木地曳きは廃れ、炭焼きと農業が主業となっていった。裏磐梯の生業の変化は、概してこのような過程をたどった。

噴火後の裏磐梯地域への開拓入植は、噴火の5年後に会津若松の有志36戸が入植した曾原開墾が最初であり、図101にもその地名が記されている。しかし、標高800mという高冷地で土壌も薄く、反収3俵といわれた厳しい

土地条件は当時の農業技術では克服しきれずに、1920年頃までにすべて離農を余儀なくされた。その後、吾妻山系の国有林と湖水の水力資源の開発が裏磐梯地域に人と物資を呼び込みはじめた。すなわち1920年(大正9)、猪苗代営林署は吾妻山系のブナ材の伐採に着手するため、猪苗代駅前に貯木場を設置し、そこから長瀬川に沿って小野川上流部の現在のグランデコススキー場付近まで24kmにわたる森林軌道を敷設した。さらに1926年(大正15)には小野川に、1930年(昭和5)には曾原に「官行斫伐」と呼ばれた木材製品事業所が設置されてブナ材、木炭、薪、鉄道枕木を生産し、1940年(昭和15)には曾原の北方の山間部にも森林軌道が敷設された。

森林開発と前後して、小野川・秋元両湖では大正年間に下流側に水量調節の堤が築かれ、1938年(昭和13)と1940年(昭和15)にはそれぞれ落差を利用した発電所が築かれた(小野川発電所は図101中に読み取れるが、秋元発電所は図幅の東にはずれている)。泥流に埋れて消滅した細野・雄子沢・秋元の3集落も、噴火時に他所に出かけていて災難を免れた少数の村人に加えて、これらの産業や、そのころから盛んになった炭焼きに従事するために来住した人々によって再興された。

奥地山村に文化を運んだ森林軌道は1949年(昭和24)に、木材製品事業所も1969年(昭和44)11月に業務を閉じた。それに代わって裏磐梯の森林は、木材資源の供給から観光資源としての価値を持ちはじめ、新たな開発と地域の形成が行われ始めるのである。



写真65 中瀬沼から見た磐梯山



写真66 冬季の湖上穴釣り

3. 開拓集落の形成

第二次世界大戦後、食糧の緊急増産のために農林省は全国で155万町歩の農地開発を計画し、火山山麓などの全国の条件不利地に開拓地が開かれることになった。この戦後開拓地は、磐梯山周辺では10カ所余りを数える。裏磐梯では曾原と蛇平^{へびだいら}に開拓地が計画された。両開拓地は、図101中では剣が峰・曾原・狐鷹森^{こたかもり}を結ぶ道路沿いと、蛇平と小野川とを結ぶ道路沿いの農地や不作付地（荒地）の記号として見出される。

曾原開拓地は曾原湖畔の平坦地にあり、第一地区と第二地区に分れ、1946年に14戸が第一地区に、翌年には12戸が第二地区（現在の狐鷹森^{こたかもり}）に入植して、湿地性の原野の開墾に当たった。入植者には小野川、檜原、長峰などの裏磐梯地域内の既存集落出身者が多数含まれていて、すでに林業などの兼業をもち、不作時には旧村からの援助を得て離脱を防いだ。他方、蛇平開拓には1946年から47年までの間に22戸が入植した。ここでは土壤が薄くて質のよい作物はできず、不作付地が多くなって製炭や臨時雇用などの兼業が主業化したり脱落者も生じた。裏磐梯では根雪期間が150日に及ぶために冬作はできず、稲も作柄が悪くて、当初はソバ、水稻、ジャガイモなどを植え付けたが、次第に自家飯米用の水田も開かれるようになった。蛇平では昭和30年代に小野川湖畔南岸の高台に貯水池を築いて水田の開墾を行ったが、収量は低位にとどまらざるを得なかった。

両開拓地とも、ダイコンやスイートコーンなどの高原型商品作物への取り組みや、冬の収入源として鐘紡などの羊毛会社との契約で綿羊の導入が行われるなど、厳しい気候環境や土地条件への適応の努力が進められてきたが、男は林業や出稼ぎを余儀なくされて、農地の維持を女子の手に任せる農家も多かった。やがて1959年、裏磐梯に最初の電話が入り、1961年には曾原開拓地に最初の電灯がともり、そして日本経済の急成長とともに徐々に観光地化の波がやってくる。そのなかで観光に新たな兼業機会を求めて農業を粗放化させる農家もまた増加していった。

この間、曾原地区の入植農家の収入を補ったのが、曾原湖に自生するジュンサイであった。ジュンサイは1970年頃曾原湖にソウギョが放流されたことによる食害にあつて減少した後も、人工沼での栽培が取り組まれ、減反政策下の1980年頃からは水田をジュンサイ沼に造成して加工場もでき、1983年からは「木地師ジュンサイの里づくり」の地域CIに採用されるなど、裏磐梯の特産品となった。毎年初夏に沼に箱舟を浮かべて行われるジュンサイ摘みは、裏磐梯の夏の風物詩となっている。

4. 観光地化の進展

ここで、現在の裏磐梯^{うらばんだい}を図101で確認しておこう。裏磐梯への玄関口である猪苗代^{いなむしろ}方面から長瀬川沿いに北に向かうと、川上温泉を過ぎた後の急坂を登りきったあたりから磐梯山北麓の高原地帯に入る。流れ山と湿地性窪地と樹林の泥流原地帯が続き、やがて観光施設が目についてくる。そして剣ヶ峰地区に入ると、各種宿泊施設をはじめ観光協会の案内所、国立公園管理事務所、磐梯山噴火記念館などや、村役場支所、郵便局も立地して、裏磐梯の観光と行政の拠点機能が集中している。さらに北に向かうと、広大な敷地の国民休暇村を過ぎ、曾原開拓地や狐鷹森のペンション村へ、または檜原湖畔^{ひがせがわ}を通して早稲沢や檜原へ、さらには県境を越えて米沢とを結ぶ観光道路につながる。また爆裂火口を眺めながら西に進むと、檜原湖畔の観光スポットから磐梯山や猫魔岳の山麓斜面を利用したスキー場につながる。また、少し逆戻りして蛇平の民宿街から小野川湖畔を進むと、不動滝やその東のデコ平に開発されたスキー場など小野川流域の観光地につながる。

これら裏磐梯の観光地化の経過を次に概観しよう。1950年に磐梯朝日国立公園に指定された当時はまだ観光施設といえるものはほとんどなかったが、県営山の家やキャンプ場の開設など、まず夏季の避暑的自然探勝型の観光施設が設置されはじめた。1950年代末にスキー場の開設や湖上穴釣りの開始など冬の観光も行われはじめたほか、1960年代は観光道路の開通や企業の保養所の開設、そして国民休暇村の立地など、日本経済の高度成長を背景として観光地化が本格的になった時代であった。1970年代には四つの観光道路が開通したほか、民宿組合の設立が続いて開拓集落が観光集落へと変質した。その中心となった蛇平・剣ヶ峰・狐鷹森^{こたもり}の3集落の人口はこの間に30~70%も増加して、就業部門も第3次産業へシフトした。1978年にはペンション村が設立され、専門業者による募集もあって脱サラのペンションが狐鷹森を中心に増え、1980年代になると官民共同出資の大規模ホテル付きスキー場(猫魔岳北麓^{ねこま})やツアースキーコース(国民休暇村内)が開設され、冬季の道路条件の改良ともあいまって、本格的な周年観光地への変化を遂げた。そして1980年代後半のリゾート開発期には、磐梯山南麓地域をも含めてさらなる大規模スキー場や大手資本によるリゾートホテルの開設が相次ぎ、1989年に裏磐梯への年間観光入込客数は352万人のピークを記録した。1990年以降は、磐越自動車道の開通や新たな観光施設の開設にもかかわらず、入込客数は漸減して1998年は301万人にとどまった。長期景気低迷と広域的な観光地間競争の中で、新たな観光戦略が求められている。

ところで、裏磐梯^{うらばんだい}地域は公式呼称では「磐梯高原」とされているが、観光地としての発展の過程で俗称だった「裏磐梯」を冠する名称に変える観光団体が増加して、これが地域の呼称として定着してきた。地形図でも「裏」磐梯高原となっている。裏磐梯を冠する団体名は、高原から距離で7km、比高で400mも会津盆地側に下った大塩温泉にまで拡大した。これはまさに、磐梯山南麓を中心としてきた磐梯猪苗代の大観光地帯の中での差別化を意識したものといえる。「ビッグバン」がもたらした裏磐梯地域に独自の観光地としての価値が定着したことを示すものといえるだろう。

[高野岳彦]

(参考文献)

- 耶麻郡役所(1919):『福島縣耶麻郡誌』(名著出版より1972年復刊).
 山田信夫(1988):『磐梯山の噴火と長瀬川の泥流』,文化書房博文社.
 阿部国男(1994):曾原開墾と曾原開拓のころ.北塩原村郷土史研究会報「峠のみち」,8.